

# 平家物語

## 一・四 禿童 かむろ

かくて清盛、にんあん仁安三年十一月十一日歳五

十一にて病に冒され、たちま忽ちに出家入道す。

法名を「浄海」じやうかいとこそ名のられけれ。その

故しるしにや、宿病立ち所に癒えて、天命を全また

うす。人のしたがひつくこと、吹く風の草木

をなびかすがごとし。世のあまねくあふげ

ることも、降る雨の国土を潤すに同じ。「六

波羅殿の御一家の君達きんだち」とだに云ひてしか

ば、**華族**も**英雄**も肩を並べ、おもて面を向かふる

にゅうどうしやうこく こじゅうとへい

者もなし。入道相国の小舅平大納言時忠

ときただ

きやう

の卿の宣ひけるは、**「この一門にあらざら**

平家の人問は人の形とてこゝに **神であら**

にんびにん

ん者は皆人非人たるべし」とぞ宣ひける。さ

縁をひすなだ

れば、「いかにしてもこの一門に**結ばれん**」

えもん さしぬき 着方

とぞしける。衣文の指貫のかきやうより**は**

えぼし

じめて、烏帽子の**矯め**やうにいたるまで、

た折下

はえん

「六波羅様」とだに**云**ひてしかば、一天四海

まぬた

の人**皆**これを学ぶ。

けんおうせいしゆ

いかなる賢王聖主の御まつりごと、**摂政**

処置も

関白の御成敗をも、世に余されたる**徒者**

いたずらもの

などの、かたはらにてそしりかたぶけ申す  
ことは、常の習ひなれども、このゆゑは、入

はかりごと

道相国の 謀 に、十四五六の 童 を三百人

わらんべ

かぶろ

そろえて、髪を禿に切り廻し、赤き直垂を

ひたたれ

着せて、召し使はれけるが、京中に満ち満ち

わうばん

て往反しけり。自づから平家の御事を悪し

おの

きさまに申す者あれば、一人聞き出ださる

いちにん

るほどこそあれ、三百人に触れまほして、そ

しきりぎふぐ

つごふぐ

の家に乱れ入り、資材雑具を追捕して、その

る

奴を搦めて六波羅に率て参る。されば目に

見、心に知るといへども、言葉にあらわして

申す者なし。「六波羅殿の禿」とだに云ひて

ければ、道を過ぐる馬、車も、皆よけてぞ通  
しける。「禁門を出入りすといへども、姓名

けいし ちようり

を尋ねらるるに及ばず。京師の長吏ここれが  
そば 見え見えぬハジ  
為に目を側む」と見えたり。